

6月「Sisyphus」 アントニア・シュルト

1.今日は最近読んでいる本について話したいと思います。実は、まだ最後まで読んでいませんので、紹介を書くのは早いかもしれませんが、都合もあり、今書いてみないと内容と印象を忘れてしまいそうです。それで解釈が行きはぐれる可能性はゼロではありませんが、今までちゃんと読んできたので大丈夫なんじゃないかと思っています。

6月「Sisyphus」 アントニア・シュルト

2. さて、始めましょう。ギリシャ神話に興味を持つ人はご存知だと思いますが、ある物語の中、シーシュポスという主人公が出ています。どんな人だったかという、誰に聞くかによって意見が異なり、なかなかの遊人だったらしいです。様々な行動でシーシュポスが神々の怒りを買ってしまい、大きな岩を山頂に押し運ぶという罰を受けました。しかし、全力を尽くして、その岩を少しずつ山頂まで押し上げると、岩が斜面を転がり、麓まで落ちてしまいます。シーシュポスは再び岩を運ぶため山を下りて行って、永遠に続きます。無益で、目的も目標もない労働に従事するという最大の罰がシーシュポスに課せられました。ドイツ語で「Sisyphus Arbeit」（シーシュポスの労働）ということわざがあり、日本で言うと「賽の河原」に近く、いくら続けても、あとからあとからくずされる、無駄な労働のたとえです。アルベール・カミュというフランスの小説家は、人生が無意味だという前提に基づいて「シーシュポスの神話」という本（随筆）を作成し、内容をまとめてみると、人間はどんなものにも意味を見出そうとする傾向があるのに、宇宙は冷たく、私達が続けている意味の探求に全く関心を示してくれないと。そのばかばかしい状況を「不条理」だと言います。こんにちの労働者は、毎日の生活がを同じ仕事に従事している運命は、シーシュポスが課せられた罰と同じく不条理だという考え方があります。主人公のシーシュポスは意識に目覚めていて、同じ動作を何度も繰り返しても、結局は同じ結果になるというのが分かっている、特に悲劇的な運命だと思います。

6月「Sisyphus」 アントニア・シュルト

1.今のコロナ禍の中でもそう感じている人も少なくないかもしれません。変わりのない、楽しみの少ない日々が続き、どんなに自粛してもまた宣言が出て、先が見えなくなるぐらい不安定な時期です。さすがに、簡単な解決策はないですが、カミュの説によって、人生に意味を押し付けることで人生の無意味を乗り切るのではなく、人生が無意味であることを理解し、受け入れるのが人生を生き抜くための第一歩であると主張します。これを読んだとき、やはり考えさせられました。もし、人生に意味がそもそもなければ、太陽の暖かさが感じられる、お茶の美味しさが味わえる、大事な人の言葉が胸に響く理由は为什么呢。このことをとても不思議に思います。人生に意味があるかどうかを知る方法がないので、とりあえず五感で確かめられる現実集中することにしました。意味があるかないかを問わず、感覚で自分の存在が確かめられるのがこの旅の始まりではないかと思います。

